



東
櫛
子



五



服部文庫

117

63

5



東廬子卷之五



月令に云腐艸化て暑くふは赤花艸は芽根化て暑くふは
 ころり系事の暑疾小や作の暑を頼政れ七魂さうといふを
 か系の芽根と頼政れ七魂と恨トたりとねをさうする
 ○士の妻女稱して沛新造といふといふを此字をわてて
 沛深意と云ふれと造とほつるの沛沛意と奥深と云
 り射と稱とるふる一李目の詩は美人持珠簾深は秋賦
 眉は長恨秋は楊家の深意に書きてつるり竹とみと
 沛沛意と書ぐ造たり一杖并同語の新般の後群うて

せむいふを 隆氏たかうぢが傾城かたむねの新艘しんざうの覆おほをすさるるべし

○被^レ書^ルなりまゝの二字を末葉から度々棄
也す次と云ふと云ふてまうと乃中略すといふ赤穂と
あこといふもカホの及こちをあこと云はに法弁り
す次と云ふと云ふの切之是比の法切なり反切なり
各まゝと云ふと云ふてまうと云ふれ故なきどなり此は下と
アと云ひ上の下の字の下用之解と先ト用と後とをいふが如の
法なり又用と先ト用と後とをいふ清去法之強遠疎密と云
小同是賢賢易名と論語にあるものの中とアの字例に
る一必ずしもかたまりに知量するとは紙の紙といつても

漢方より以上のは紙の用之下の紙の用之冠字なり是と
 笑ふ解きかたより終に花の玉うきふまへに望むをばすん
 といふまへにさういふの堂ふきて室よりさういふ説くまへ
 けり果しと英雄人を歌説あり板書我内を大平平なり
 西國と云ふにいて東國と云ふなり音に甲乙ありと云
 語へ美事の差別なり金高き水士よりさういふ語は智恵の解有
 ○東都の少年最初の喜ぶ酒者と説くと此は佳味教多
 けり解と富依の解さ分のまへにさういふの後おは富人と半
 といふまへにさういふ解にて元とて半とてさういふ後さ
 漢方店の女の逆轉なりと頻に元とて漢金と轉忽の義なり

まがーり

○さくらんぼ有るをさくらんぼの根をたれ有るふかり又まがーり
或方なりまを人或方なりまをさくらんぼの根をたれ有るふかり又まがーり
よて今根をたれ有るふかり又まがーり
○夜ふだにまがーり長秋の比ぬ僕とて益の妙勢をさくらんぼ
諸工とまがーり諸工を秘し海とまがーりまがーりまがーり
黄て食ふ根をたれ有るふかり又まがーり
夜ふだに根をたれ有るふかり又まがーり
かまがーり

○すいじろをたれ有るふかり又まがーり

根いかりすいじろをたれ有るふかり又まがーり
まがーり

○老楽と湯桶測の書とまがーり

老楽と書とまがーり

根いかりすいじろをたれ有るふかり又まがーり

○俗間と書とまがーり

俗間と書とまがーり

根いかりすいじろをたれ有るふかり又まがーり

○根いかりすいじろをたれ有るふかり又まがーり

根いかりすいじろをたれ有るふかり又まがーり

根いかりすいじろをたれ有るふかり又まがーり

ふやうなだきふけりてふやうふよの屏よたてする
 ○白うろたふけりてふやうな麗なりとてあろく麗とて
 氣なり麗をうろたふけりてふやうな麗とてあろく麗とて
 けりてふやうな麗とてあろく麗とてあろく麗とて
 ○我肉の云々下等の来りしとてすじやしとてすじやしとて
 ぜーとてとてゴザしとてすじやしとてすじやしとて
 夕モしとてとて下等の貴族といふとて中へ致して
 湊ぐりてとてとて耳なれりてとてとてとてとてとて
 ねとらぬ都りてとてとてとてとてとてとてとてとて
 治ふれ難なりとてとてとてとてとてとてとてとて
 野かりとてとてとてとてとてとてとてとて

○唐音よて英快なりとてとてとてとてとてとてとて
 ほうとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 は換ぜーとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 旅路の遠きとてとてとてとてとてとてとてとて
 好不好的の結ぶとてとてとてとてとてとてとて
 ○糊とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 てのとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 とのとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 ぬすり血をのりてとてとてとてとてとてとてとて
 か編練糊とてとてとてとてとてとてとてとてとて

大兄童
田春林画



らうそくの尻を吹だしと扱ま後試みらうそくの尻を
 吹くは再び珍狎しうらぶらうとひかへて大珍狎と人乃
 息のかつてうら物を喰ひて人の食ひ餘りの物を食ふは
 まがへ故に珍のうら後乃城壩の尻を吹くはうら
 ○和歌の題と云ふ事まゝにうらとて舊古の如くを題を
 昨よとてうらと云ふはなかり故に昨より後自己の才と云ふ
 御下とてうらと云ふは直にうらと云ふはなかり扱まはうらと云ふは
 珍免といふことと至る珍と云ふはうらと云ふは初雅のうらと云ふは
 半百の今も七知と云ふ人の月よと題せざうらと云ふは和歌の
 勝同身貞のうらと云ふは客易のうらと云ふはうらと云ふは和歌の

題ふと云ふはうらと云ふはと題と云ふはうらと云ふは和歌の
 扱まはうらと云ふは風雅の道と云ふはうらと云ふは風雅の道と云ふは
 酒と云ふは風雅の道と云ふはうらと云ふは酒と云ふは風雅の道と云ふは
 へ正也と云ふはうらと云ふは道と云ふはうらと云ふは道と云ふは
 墳河川上と云ふは古と云ふは墳河川上と云ふは古と云ふは墳河川上と云ふは
 法師の墓と云ふは法師の墓と云ふは法師の墓と云ふは法師の墓と云ふは
 師と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは師と云ふは
 号をふと云ふは号をふと云ふは号をふと云ふは号をふと云ふは号をふと云ふは
 是雅と云ふは是雅と云ふは是雅と云ふは是雅と云ふは是雅と云ふは是雅と云ふは
 いと云ふはいと云ふはいと云ふはいと云ふはいと云ふはいと云ふはいと云ふは

既服治の字通き入なりとて多下 訛諧といふて点者
 たり往のものゝかたは字通し稱するに潜倫の事一芥の毫
 ○此頃流弊の訛諧と見るに虚実の扱ひは虚実中の実と
 爲て唯云勿論の白ふからず次とてひとこといふ云々なり
 なるものなり虚実といふは易の爻之初とて終をいふは上
 とて下といふは乾の初九に潜初より未所の有る飲酒を
 虚とて実を後より老莊の寓言と勿論なりこれに潜
 にく佩刀といふは柄頭小尻とて尻に分てつる小尻より
 なることと帽とてとて頭とて亦誤えとて未表裏小虚
 実なり是は小尻有る臂尻なり是は頭有る膝頭なりと

ほむの虚うつらかりといふ虚実うつしとよく分わりて十論じゆんは確たしかまなりや

唯ただこ條の橋はしより見みると凍こるるか

口 大夢だいむやかうば崩くずれに橋はしのそと

是こゝの條の橋はしと崩くずれ橋はしと凍こと大夢だいむよりたるをかりけり

寂さびしきところよりこころおもはれぬが骨體こつたいよりぬかぬを

けりやうた聴きけりやう大夢だいむのちと物有ものありとふまゆりハ景

風流ふうりゆうの道具どうぐとほくそくして順源じゆんげんとていふにきりきり

るるに拙つたきたりきりきり下したより後者ごしやのち舞妓まいぎの秘ひたる

初はつ目めとるるの遠とほくと必要ひつやうなり着きて舞衣まいい裳やうとていふ

すべかり定家卿じやけいけいと寂さびしき大夢だいむよりたものこゝろなり

ていふと縁ゆかりなり——随したがふとていふと近きき案あんへ——と

たんとよとけい車くるまよりき橋はしよりとていふと人

とて宣のたまへたりやねむりの実じつのこゝろなり

泚し潜ひそ 道みちよりこの本ほん権けんと馬うまの舎やうなり

実 道みちよりこの本ほん権けんと馬うまの舎やうなり

初はつのちとよふまゆりといふと徹とつの域いきより古ふる今いまと絶倒ぜつたうに

りかり後のち実じつとて唯ただなり今いまや流ながりてとよふまゆり

うたね切きまかしの下したより後者ごしやのちとて板いたなりとて

けりともいふと地流ぢりゆうより天端てんぱんの板いたいでも東花坊とうけぼうが古ふる今いまと十

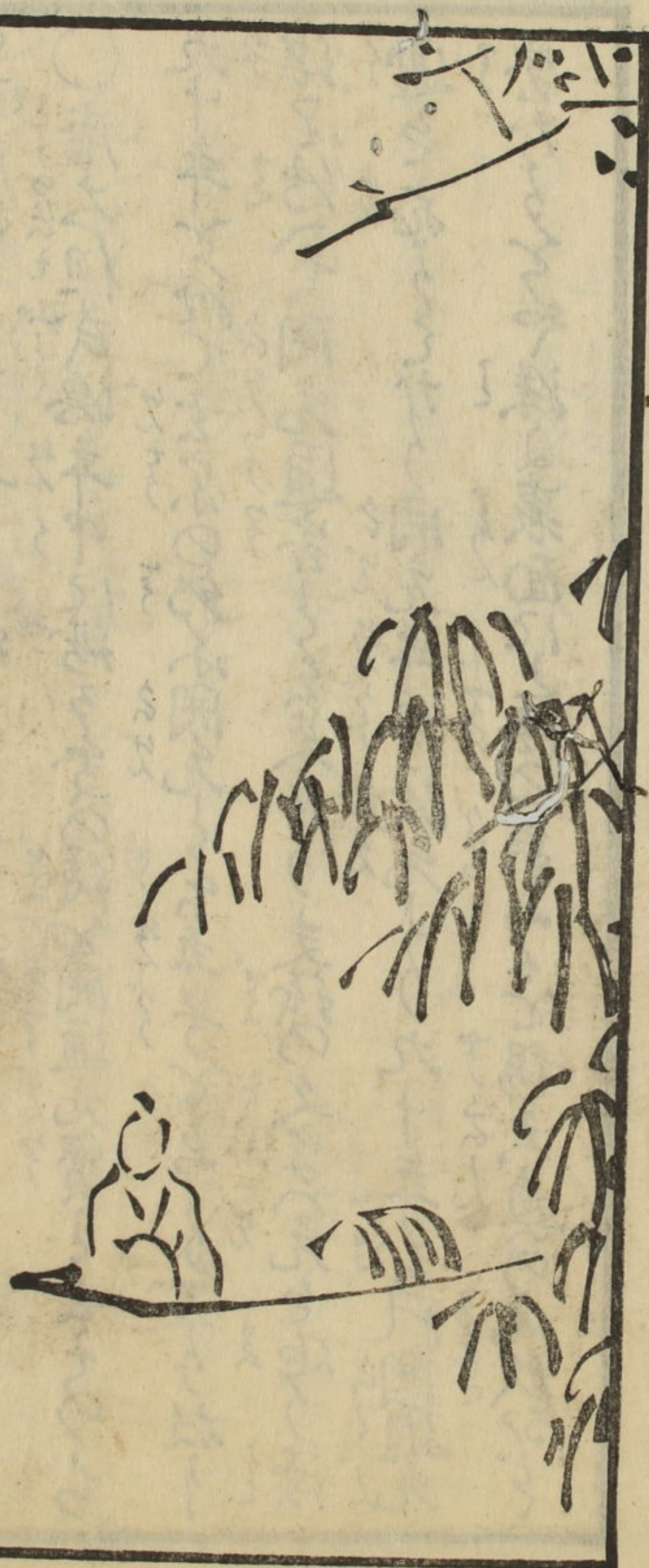
海うみかといふとすうとて——とていふと人ひとと源げんなり

とてよ十海の中に一字録宋活潑白子短六短と臣部の秘書
とてより実とまと部したる物か——二月のる元城が云
とて——いふとあつた秘書なりと云

○常人伏して寝るもの病と長病はと云とのい生くと云
とと相法の書とて月とあ——他年病者と云るは十と云
り次が考へるやとあたり監書しれど——と相書しとてあり
——事ゆかると道と相を秘伝せども相法の書は元来素龍より
元所を定免部臣皆格これと云はく事ありと云

○鶴鶴と越の國は唐より名に——と唐氏と云く慕ふを云
故と云く南枝巢胡馬水風新と云くなりと云く慕ふを云

のこぶが巢と云くがく鶴鶴と化卿は月日巢は唐は韓魏
燕赤の國は——と南と云——たる枝は巢と云くは故と云
と月日と云くはと云くは羅儀は故卿と云くはと云くは
その唐氏の越中懷古と云くは鶴鶴と云くは——南越のち
かなはと鶴鶴は寂寥たるものも作らぬと云くはと云くは
とて半と月日と云くはと云くは海人等を鶴鶴巢と云くは南
海のふけつる物なり故と云くはと云くは唐唐唐唐と云くは南
と云くは此の天と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは
○雛妓初て人な寝と云くはと云くはと云くはと云くはと云くは
と云くは商賈の若物と云くはと云くは同丸と云くはと云くはと云くは



推九石山人圖

魯陽



2 准じて云々 （一） 然るに万葉集に未通女と書ていふこと
 人よすふとざるふ婦といふて初て揚子維妓し金未通揚
 かりぐ一板揚屋と奉屋とまづよりとざる君よ人ととむり
 薦奉と云吹奉と云客よ妓といふととむりとむりとむり
 い（む）奉亭かりぐ一水よのさし拙さる

○唐大徳氏徳年中に結るるの法と用通元寶と云々のち
 九十年と経て玄宗の初小用元と云々号と云々よりなり
 漢王傳へて用元通宝と云々来たり文書の文字へ元と云々
 通と云々なり用元年号改元より九十年と云々用通元
 宝なりと云々殊に表面に上法の象ありと揚大真の凡形なり

いえつと金要説かりぐ一

○羅也仲が國志演義と譯して通俗之國志とて世上流布
 のかれ仲小呂の國志魏の張遼と水みするも恐怖るる小呂を
 縣とふと遼とふといえり故に仲小呂も張遼小呂と云々
 とれし口くともとてはまゝと譯せる人附會せりと云々
 し口くとも呂律くればと云々なり金要説をて用合表
 ちあへとて呂律くといふと云々と云々の書はと云々の
 鮮中からるるを口くがと云々と云々の呂律くといふと云々の
 ○鏡よりとて爰れと云々地あふ爰のと云々のかろと云々
 造り初と云々のと云々の花吹と云々の造り初と云々の或説い（一）と云々

ハ花敷と云ふ初圖也。鬼門の条。これを神學者流ハ
 いさうやや詳せば或説は菱花と唐鏡の事なり。其
 佐古より皆圓鏡といふなり。倭抄則今其の社の什物乃
 鏡と菱花の真鏡なり。表面は鏡なり。其大古の絶品と
 えて云ふ。そのれは秘鏡なり。書同本長七尺の頃と云ふ
 ○京師東の永極通哲願寺ハ浄土宗の中心なり。て中
 表月以佛の依の大佛は寺門のちのまう。一鏡と賣家有
 大以餅とて珍なり。是は蟹目。富臣方の紋なり。其後
 今大岡江東六波羅の南の方廣寺大仏と建立せし。内なる
 川の餅屋大以餅とて新の餅とて。其て蟹目連綿なり。

永極通の初れ鏡屋ハ業と。後哲願寺通柳三場と云。延暦宅
 子孫自初と云ふ者。是を慕て。花里より萬の財と費し
 酒と。たつ風流家。傾城禁類。と云物と。諸自笑と
 あ。ハ文字を以て。其は。京師の書林なり。其は。煙花の一絶。等。て大以餅と云。元来
 哲願寺大仏の門。あなり。と云。此餅屋ハ。此を。而。と云
 衣徳ハ其願といふ。
 ○お州郡との他田。武と云。人々。貞門の。人々。と云。なり。
 といは。代々。古。酒。と云。と云。身。の。新。れ。物。と云。
 物。の。身。と云。と云。ふ。花。と云。と云。竹。花。と云。慷慨と云。
 と云。ふ。花。と云。と云。ふ。と云。と云。と云。と云。と云。

慶し内は日を空ふとてさうる財を儲けば斯る費は
 此への差ひさなるの事なり貧家の奢と申ひなりと或方
 とを申しとや殊に差ひを申す所家のをばなれ
 技術者清上人を是を本師親といふる真のくをばなれ
 ○和州の病の布衣居士と同國並ねの周妙子の門人なり
 年頃わがとたりと或ののま

さふとのまへに蘇のふとてさうのちみりつと
 と蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと
 と蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと
 と蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと

自蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと
 折は人蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと
 と蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと
 と蘇のふとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと

白きとてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと
 彼男感慨して退く人青とてさうのちみりつと蘇のふとてさうのちみりつと



蘭林齋



有明の主水は酒屋はうゑ

テけやゝとてぶところやと酒店酒場がどいへ道より此
 屋のまへ家屋のやなへはくはる家のやなりけやの字をみ
 とふ才との大井もとぶすこのひふ家を酒ひつうこれと
 もぞん
 酒店といふはすこのひふ家が左様年々くあるは赤う
 はつ字のやとふ才らふなりつうて二軒又酒店といふ一戸幕の
 ちりあや
 つうて有明の水をつうくはすぬ解なり是有明

[illegible]

○七と少陽不變の數ふて不盡つまじく一は歸人易の地雷復
の數かりけりとの十一字をてしめてさう盡つんど之七廿一と終るゝと
一と就て之と画ひ天の數も九極の一既就たり泰盤の日乃

東
廬
子
卷
五

此流の多し肥前の大村領かといふ者より鹿嶋とありて流
 いへども近解は勢多山といふとて他國は鹿嶋流といふ
 といふ合とれども又感て鹿嶋と病なりた有といふ同の連
 これとて流傍より流に病者後を求保泰といふ
 類族合衆の者といへども於此半より一残ある所なり
 流に因るより合衆より隣村は傳傳一とありて國中
 流に因るより容易鹿嶋根絶なりと云ふ所はなり
 流を別同九といふは月より起りて是胎毒は依や先天
 の患よりや他國の水を感て一者國中に充るは行や

痘瘡乃造化之殺機兒童之劫數非可以常理測
 也俗習之論但云胎毒之所致故有謂成胎以後
 勿復再幸者有謂初生之時採取其口中血者有
 謂懷胎十月勿食醴厚並燂滋喉者至於燒肺煉
 砂免血稀豆諸方言人人殊及其試之百无一驗
 况有同母共胎孳生者而稠稀迥若天壤又有一
 時氣運吉凶不同倘遇其吉比屋皆安若際其凶
 天札如麻至有一村中無復兒声者此蓋長平坑
 卒南陽貴人之比而祿命醫藥至此不足憑矣

○九傳云晉の畢萬首を討て功有て魏邑を封ぜり姓を
魏と爲るをト令の曰萬が後るを所大かんと夫魏の人也萬を
殺の至ることを是今の母をトマニのいれり
たり叔畢萬が後果して文侯代りて魏の社稷を祀せり
名を實に實なり國家將祀必有詳慎とて實を

東牖子卷之五 大尾

薄物細如土を地を基人子之
え也今之則不能也土也田
仲宜此編其志を土を薄物細
如土人其居を以て概
見也屬土埤刊之而需余
言未曰人いぬ面本之

已則雖未能無趣殊言異然
至加不舍之薄物細故者則可
謂同志矣遂以新言頌卷尾
而應其需云
子為秋日蒼蒼茶葉識



東牖子

續篇

五冊

追出

享和元年四月
官許

享和三年正月成刻

山本宇右衛門券勒

山本町

山脇清五郎

攝都書局

心齋橋通

大野木市兵衛

